

## 1937年のプラネタリウム生解説

嘉数 次人

### 1. 日本のプラネタリウム史は85年。生解説の歴史も85年。

日本でプラネタリウムが登場したのは今から85年前の1937(昭和12)年3月にオープンした、大阪市立電気科学館に設置されたカール・ツァイスⅡ型投影機が最初です。照明を落とした直径18メートルのドーム天井に映し出された本物さながらの星空を見た多くの人々は、その美しさ、精密さに魅了されました。それ以来、現在では国内に数多くのプラネタリウム施設が作られ、私たちにとって身近な存在となっています。

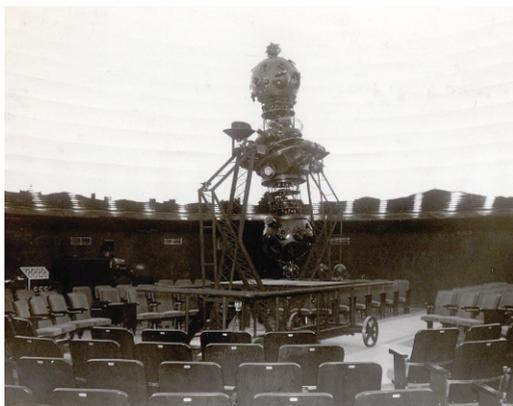


図1. 開館時の電気科学館のプラネタリウム

プラネタリウムで忘れてはならないのが、映し出された星空の下でお話をする解説スタッフの存在です。現在の様な自動演出がなかった時代ですから、当時の投影はすべてスタッフがライブでお話をする「生解説」スタイルでした。そして、現在においても、全国のプラネタリウムで生解説を取り入れたスタイルの投影が盛んに行われています。

ところで、プラネタリウム投影の演出方法で、よく目にするパターンとしては(大同小異はありますが)、

- ①夕方の方の日の入りの演出
- ②投影当日の夜の星空解説
- ③一つのテーマをクローズアップして解説
- ④翌日の明け方の星空解説と日の出の演出

というものでしょう。このなかでも、特に③は「テーマ解説」、「特集テーマ」などと呼ばれ、一カ月または数カ月ごとに話題を変えていきます。現在では、テーマ解説の部分はプログラム化されたコンテンツを流すパターンも多く、私たちの大阪市立科学館でも取り入れています。

では、このような①～④の一連の演出手法はいつ頃誕生したのでしょうか。答えは、何と電気科学館がオープンした1937年なのです。

## 2. 電気科学館オープン当初の解説



図2.『大日本』昭和12年5月号の表紙

電気科学館がオープンした当初のプラネタリウム演出と解説はどのようなものだったのでしょうか。筆者は当時のことを知りたいと思っていました。そんな中、大阪都市協会発行の雑誌『大日本』の昭和12年5月号に掲載された「電気科学館マンガ訪問」という訪問レポート記事を見つけました。記事の著者が電気科学館を訪問した時の体験記を、イラストを交えて紹介した楽しい記事です。訪問日時は不明ですが、恐らくオープンから1カ月以内のことと推測されます。この記事に、プラネタリウムの演出の流れが簡単に紹介されていたのです。

記事は、著者がドームに入るところから始まり、まず「天象館に一步足を踏み入ると、和やかな照明の投げられたドーム一ぱいに心地よきメロディが流れて、…やがてコブだらけの怪物が動き出すと、ドームは次第次第に夕暮れてい

って、…地平線に太陽が没するとまず宵の明星が輝き、続いて無数の星が銀の砂をまいた様に輝きだす」とあります。その後は、夕方から明け方までの星空解説があり、さらに太陽の年周運動を見せながら四季の変化の解説、月の運動と満ち欠け、北極で見た星空、赤道直下の星空の解説へと続きます。そして最後は、「四十分の興味深い説明が終るとさわやかな音楽の伴奏で暁の明星輝く夜明」となって投影終了です。

この記事から、投影は夕方の日の入りのシーンの演出から始まり、翌朝の日の出の演出で終わるというスタイルが既に登場していたことがわかります。ただ、電気科学館を運営する大阪市電気局の社内報など他の記事を見ると、太陽は出さずに、単に室内照明の調節だけで夕暮れを演出するパターンもあったようです。

一方、オープン当初は「テーマ解説」が無く、太陽や月の公転による運動や、北極や南半球で見た星空の紹介という、いわばプラネタリウムの機能をふんだんに使った、かなり密度の高い演出をしています。これは、プラネタリウムのお披露目として、機能アピールの意図もあったのではないかと想像できます。

機能アピールの意図は他の資料からも窺うことが可能です。大阪市電気局の社内報『サービス』によると、開館直後においては、投影が始まる前のドーム内で電気科学館とプラネタリウムの紹介が行われており、「…これは非常に高価な物でありまして、私共の方では四十六万円かけているのであります。果たしてそれだけの効果があ

るかどうか、これから五十分間にわたって、実演・ご説明申し上げますうちにご理解が願える事と存じますが、この機械の持つ性能としましては、まずこの人工的に作った大空に、天体の変化、運動の千変万化を如実に映し出すというものであります」と述べられていることから、まずはお披露目的な演出を意図したことが想像できます。

そのほか、プラネタリウムと言えば、夕方の方の日の入りと、明け方の日の出時にBGMとして音楽が流される演出を思い浮かべられる方も多いかと思います。現在、多くのプラネタリウム施設で用いられているこの演出も、最初に登場した正確な時期は不明です。しかし、先に紹介した『大大阪』の記事から推測すると、やはり開館当初からほぼそれに近いスタイルが用いられていたと考えられます。

### 3. 「テーマ解説」のはじまり

電気科学館のプラネタリウムでは、45～50分間の投影の中で、それぞれの時期に見える星空の解説に加えて、月ごとにひとつのテーマを決めて詳しく解説する「テーマ解説」を行っていました。例えば、戦後の1968(昭和43)年9月のテーマは「一万年後の星空」、同じく10月は「名月の皆既月食」でした。

記録に見られる最初のテーマ解説は、開館半年後の1937(昭和12)年9月からで、9月は「黄道光の話及び捕鯨活躍の南氷洋の1日」、10月は「宇宙の構造及び秋の星座」でした。

テーマ解説をはじめた意図は、1939(昭和14)年に発行された「天象儀の話」という来館者向けパンフレットに「プラネタリウムの演出話題は極めて多数により、到底これを一時に観覧せしめることは困難である。従って本館においては、毎月話題を順次繰り替え、一年間にはこれが一巡し、以って一般宇宙に関する大体の常識が得られることになる」と書かれています。

このテーマ解説という方式は、解説者としてはテーマを絞ることで一つ的话题をじっくり紹介できるメリットがあり、また観覧者としては飽きずにリピーターとして楽しむことができるメリットがあるなど、プラネタリウムを長期間楽しむことができるアイデアだと思えます。



図3. 電気科学館で毎月配布されたプラネタリウムのパンフレット。昭和14年3月発行分。この月のテーマは「春の星座と曙に集う遊星」でした。

#### 4. 「テーマ解説」の広がり

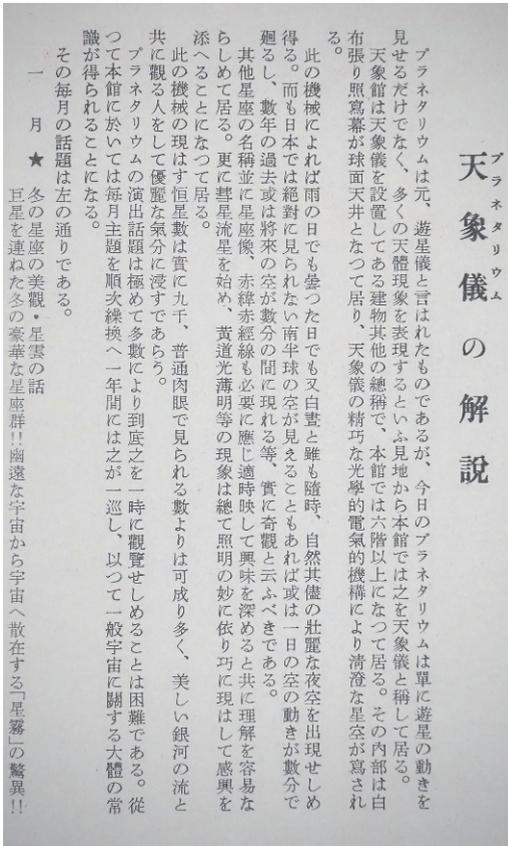


図4. 電気科学館のプラネタリウムのパンフレット「天象儀の話」。昭和14年発行。プラネタリウムの概要を解説したあと、月ごとのテーマ解説の説明があります。

科学館では、来館者向けに配布された月ごとのプラネタリウムのパンフレットや、「星の劇場・プラネタリウム」というキャッチフレーズも戦前から登場していて、当時の人々の工夫が窺えます。

来年(2023)年は、光学式プラネタリウムが発明されて100周年。それにちなんで、各所でプラネタリウム史の研究が始まっています。その中で、現在では忘れ去られた事柄が再発見されるかもしれません。今後の研究の進展が楽しみです。

**嘉数 次人(科学館学芸員)**

注：資料の引用にあたっては、旧字、旧かなを現代表記に改め、また一部句読点を加えています。

#### プラネタリウム 天象儀の解説

プラネタリウムは元、遊星儀と言はれたものであるが、今日のプラネタリウムは単に遊星の動きを見せるだけでなく、多くの天体現象を表現するといふ見地から本館では之を天象儀と稱して居る。天象儀は天象儀を設置してある建物其他の總稱で、本館では六階以上になつて居る。その内部は白布張り照寫幕が球面天井となつて居り、天象儀の精巧な光學的機械機構により清澄な星空が寫される。

此の機械によれば雨の日でも曇つた日でも又白晝と雖も隨時、自然其儘の壯麗な夜空を出現せしめ得る。而も日本では絶対に見られない南半球の空が見えることもあれば或は一日の空の動きが數分で廻るし、數年の過去或は將來の空が數分の間に現れる等、實に奇觀と云ふべきである。

其他星座の名稱並に星座像、赤緯赤經線も必要に應じ適時映して興味を深めると共に理解を容易ならしめて居る。更に彗星流星を始め、黃道光薄明等の現象は總て照明の妙に依り巧に現はして感興を添へることになつて居る。

此の機械の現はす恒星数は實に九千、普通肉眼で見られる數よりは可成り多く、美しい銀河の流と共に觀る人をして優麗な氣分に浸すであらう。

プラネタリウムの演出話題は極めて多數により到底之を一時に觀覽せしめることは困難である。従つて本館に於いては毎月主題を順次繰換へ一年間には之が一巡し、以つて一般宇宙に關する大體の常識が得られることになる。

その毎月の話題は左の通りである。

一月

★

冬の星座の美觀・星雲の話  
巨星を連ねた冬の豪華な星座群!!  
幽遠な宇宙から宇宙へ散在する「星霧」の驚異!!